

クィア・ポリティクスとポリティカル・コレクトネス

「生の保障」と「アンチ・ソーシャル」との間で

東京大学 清水晶子

本報告の目的は、非規範的な性自認や性的指向とかかわる政治的・文化的諸課題を「ポリティカル・コレクトネス」やマイノリティ権利保障の領域に属するものとする理解が一般に浸透しはじめた日本の「〈LGBT〉ブーム」の現状を念頭におきつつ、1980年代から90年代にかけて非規範的な性と身体政治として成立したクィア・ポリティクスと「ポリティカル・コレクトネス」との緊張に満ちた関係の歴史をあらためて整理することである。

今世紀に入ってから欧米各国および国連を中心とした急激な〈LGBT〉主流化の動きは、非規範的な性と身体政治をマイノリティ権利保障の問題として推進することに貢献してきた。しかし、AIDS流行および同時期の宗教的・道徳的保守主義の高まりへの抵抗として80年代後半のアメリカ合衆国で誕生して他国・地域にも広がり、いわば〈LGBT〉主流化に向けての土台を作る役割を果たしたクィア・ポリティクスは、一方で権利保障要請の側面を持つつつも、他方でマイノリティのアイデンティティ政治に批判的な側面をもっていたことでも知られている。クィア・ポリティクスのこのような二面性はE.セジウィックを参照して「マイノリティ化」傾向と「普遍化」のそれとの矛盾を孕む共存としても説明可能であろう。

しかし、ポストコロニアル研究やフェミニズムなどの台頭に対する反発という「文化闘争」において採用された「ポリティカル・コレクトネス」概念との関係を考察するためには、マイノリティ化か普遍化かという二分化に加え、さらにそれとも異なる形でクィア・ポリティクスの二面性を理解する必要がある。すなわち、文化における生の保障の要請に向かう側面と、文化的に承認された生の様式それ自体の破壊的変革を求める側面との並存である。これは文化政治としてのクィア・ポリティクスにかかわるもので、とりわけ後者は、80年代のセックス・ウォーズでのポルノ規制派フェミニストとの対立、「共感できる同性愛者表象」を嘲笑うかのようにして作られた90年代のニュー・クィア・シネマのムーブメント、2000年代の「クィア・ネガティヴィティ論」など、いわば「ポリティカル・コレクトネス」とはつきり対立する「クィアな反社会性論」の系譜をつくってきた。

本報告では、セックス・ウォーズ時の反規制派フェミニストでもあったG.ルービンやL.ドゥガン、AIDS流行期のL.ベルサーニ、そして2000年代の反社会性論の代表的論客とみなされるL.エーデルマンらの議論を通してこれらの「反社会性論」の主張を確認し、これを、同じくポリティカル・コレクトネスに批判的距離を取りつつも「反社会性論」ではなく「生の保障」の議論へとむかうJ.バトラーらの議論と交錯させる。それによって、まずクィア・ポリティクスと「ポリティカル・コレクトネス」との原理的な乖離を明らかにした上で、〈LGBT〉主流化の時代の非規範的な性と身体政治が「ポリティカル・コレクトネス」の現代の様態とどのような関係を結んでいるのか、そこでクィア・ポリティクスが果たすべき役割はなんであるのかを、明らかにする。